
Momentaly*Beautiful

Noah

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Momental Y* Beautiful

【Zコード】

Z4528A

【作者名】

Noah

【あらすじ】

レダは鈴蘭の香りに引かれて霧の森に迷い込む。そこで見つけた
古びた屋敷　扉をあけ中に入ると不気味なほどに綺麗な鏡。その
鏡を覗きこんだ途端に、触れてはいけない世界のものとの舞踏会が
始まる。少し怖くて悲しい愛。

プロローグ

黒くくぐもつた空の下。

朽ち果て荒廃した屋敷。

死の季節をくぐつたかのように荒れ果てる庭。

鎧びて鈍い銅色に変色した鉄の門。

『あの頃は全部生きていたのに』

イオは雑草が茂り、まるで生氣を無くしたかのような庭の真ん中に一人立つて辺りを見回したのち、両手を広げつぶやいた。金色の髪の毛は力強く天に向かつて立ち、濃い黒色のグラスをかけている。そのグラスの内側で、長いまつげが備えられた青色の瞳を軽く閉じ、鼻の高い顔を空へと向ける。漆黒の細いスーツに身を包み、瞳と同色の鮮やかな青のタイ。

この悲しくつらい空間はまるで何か物々しく行われる葬儀の様で、彼の正装はその葬儀にふさわしく拍車をかけるようだつた。伸ばした白い腕が服の袖から姿を見せる。

彼の右手の細い手首から一の腕にかけて、藍色の刺青が怪しく施されていた。長い蛇がその身を伸ばしている姿……それはまるで彼の右腕を這い上がつて行くかのようだ。

やがて彼は瞳を開いた。それに続いて、薄い唇から吐息に混じるよつこその名前が吐き出された。

『…………レダ…………』

どこか遠くの空を見つめて。

今、彼の目には何が映っていて、彼の脳裏には一体何が浮かんでいるのか……？

『もっすぐ……君に会えるかもしれない……』

言ったイオのその瞳は不安に揺り動いていた。でも、喜びと期待に満ちて居るようでもあった。

『君のために……花を植えよう』彼はまるで風のようになびく、でも意思の強くこもった声で、その言葉を庭に残し、屋敷に背を向け、錆びた門を重く重く押し開く。

『レダ……おいで。』

門を両手で背後に払いながら、イオはそう囁いて霧に包まれる森の中にその姿をくらませて行った。

I : レダ

『信じられない……』

鉄の門越しではあつたが、田の前に広がる異質な光景に、レダは目を丸くした。驚きと感動のあまり立ち尽くしたまま声がない。レダの薄い空色の瞳に映っていたのは

暗く曇つた空

荒廃した古い屋敷

錆びた門

そして、広い庭いっぽいに隙間無く思いきり咲き乱れている、灰色の花。

『薔薇……』

レダはその花のことをそう呼んだ。緑色の茎や葉に埋もれながらも顔を覗かせるその花を。

幾重にも重なった高級感のあるしなやかな花弁。茎のところどころから鋭く突き出る小さなトゲ。

レダが今見ているその花の全てこそが、その灰色の花が薔薇であるとの証拠であるのに……証拠であるはずなのに。レダはどうにも不可解な感情に包まれて、拭い切れないでいた。

ただその感情は、不可解であるが故に不思議で美しくもあつたが。『灰色の薔薇なんて……見たことない』

誰に言つわけでもない……レダはただ一人ぽつんと呟いていた。

空には、素敵な太陽が照っていた。その光はいつの時代も優しく強く、地上の生命を育む。

かわいい彼女が、羽のように丘を舞うよ。妖精のような笑みと、繊細なメロディをその口から紡いで。

レダは心地よい日差しのもと、緑の茂る季節の中で、一人丘で歌っていた。とても気分がよく、清々しい。黄色いドレスワンピースの鮮やかな黄色が、彼女の歌と吹き抜ける優しい風に合わせて踊った。残る残像は、妖精の羽のよう。

レダの澄んだ空色の瞳は透明に近く、白い肌と長い金色の巻毛が上質な彼女にとてもよく似合っている。そろそろ年も22、3程度であるだろうに、レダの顔は少女のように幼く、その内に秘められた彼女自身の性格も同じように可愛らしきものだった。だから、黄色もよく似合ひ。

レダは急に、立上がりその足を丘の向こうに向けた。そこは冷たい霧の森。この辺りに住む人々は誰も近付こうとしない場所だった。入ったものがないから、森の奥がどうなっているのかなんて誰も知らない。レダだってもちろん知らなかつた。別にわざわざ森に迷い込む気も無かつた。

今日の、たつた今まで。

『薔薇の香り…』

紡がれていた綺麗な歌は知らぬ間に聞こえなくなり、レダの口からはそんな独り言が漏れていた。

レダの小さな鼻は、間違いない薔薇の香りを感じとつた。

上品で気高いあの香り。

レダは何故か、ずっと前から薔薇が大好きだった。何故かはわからないけれど、気付いたら好きだったのだ。だけど、それは本当に元からレダが好きだったからなのかはわからない。何故なら気付かぬ間に薔薇の魅力に酔っていたから。元は誰かが好きだったのかもしれない。……けれど、今になつてはそんなことはどうでもいい。その香は、妖しく、香しく、レダを森へといざなつた。

どれほど森の中を歩いたのだろうか。

森の奥に迷えば迷うほど木々はだんだんと生い茂る。空の太陽は黒雲の陰に姿を隠し、足下の雑草はその丈を増す。

黄色のワンピースはところどころに汚れが付き、端を鋭い枝に引き裂かれ、あの妖精のような輝きは失われていた。レダの猫のようだった細い金色の巻髪も、枝にひっかかりもつれたままで、今では少し見苦しい。けれど、レダ本人は妖精の輝きや猫の巻髪よりも、自らの鼻をくすぐる美しい香りの方が気掛かりだった。

だから、

歩いて

ひたすら歩いて……。

そしてやがて香りをたどり見つけ出しが、この灰色の薔薇が咲く不思議な庭だったのだ。

『綺麗……』

彼女は、この庭の放つ灰色で七色な空気に完全に魅せられてしまっていた。そしてどこか幻想的な気分のまま、いばらの間を縫うようにして、ついにその庭に足を踏み入れた。重い重い鉄の門を、ゆっくりと押し開いて。

『いい匂い……』

まるで灰で作られたような不思議な薔薇は、普通の真紅や桃色の

それと同じように水みずしくていい香りだつた。一輪だけその緑の茎から素敵な花を失敬する。可愛らしい、レダはその折った薔薇をそのまま己の髪に飾つた。薄い金色に、物静かな灰色。そしてレダの澄んだ空色の瞳とピンク色の唇。いくつもの淡い色の組み合わせがとても綺麗で、周りの灰色に溶け込まない。

その色は庭の中を歩き回り、不思議な灰色に心まで染めあげられて、気付かないでいた。

「この庭が、この薔薇が……今の彼女にとつてとても大きな意味を持つ場所であつたことに」

『……でも、何かおかしい』

庭に咲き誇る薔薇は申し分なく素晴らしい。息づく命の響きが伝わるようで、不思議な灰色すらも美しく見える。けれど……

一体誰が……この薔薇達の面倒を見ているのかしら……？

庭はひたすら広いけれども、その奥には大きな屋敷が見える。普通に考えれば、屋敷の住人がこの薔薇を育てていると思うのが普通だろう。……けれど。

『ほんにちはあ……。』

レダは、やはりあの素敵なかわいらしい薔薇の持ち主が気になってしまつて仕方がなく、その足を屋敷へと向けた。そして、錠もかかっていない大きな扉に手をかけた。

扉は低く低く、軋みながらその両手を開いてレダを冷たい体内に迎え入れた。

悲鳴のよつな
唸りのよつな

低い低い声とともに。

レダの高い声は扉の内側に吸い込まれ、しばらくの余韻を漂わせたあとで、静かに静かに消え去っていく。

荒廃した屋敷の中はただ暗く、奥の方は闇に埋もれて黒以外何も見えない。ただ、部屋の隅々には蜘蛛の巣がはり、金属の装飾品は汚く錆びつき、割れた陶器のようなものが破片となつて散らばっていた。床に敷かれた絨毯は誇りと汚れで黒ずんでいる。

無論、人の住んでいる気配は全くない。

じゃあ誰があの薔薇を？

膨らむ好奇と少しの不安。冷たい空氣に背中から胸から抱き抱えられながら、レダは強い興味に負けて、その屋敷の中へと入つて行った。

暗闇だつたから、レダは怖かった。周りに窓はあるものの、外の空氣も暗く重たい。屋敷の中に差し込んで来てはいても、あまりこの雰囲気は晴れない。

次々と扉に手をかけるつむじ、田も暗闇に慣れてきた。

金色の巻髪が、どこからともなく差し込むわずかな光の粒をとらえて、暗闇の中で静かに光る。揺れながら……。

どの部屋もやはり荒れ果てていた。リビングと見える大きな部屋では、置かれたソファの布地が破け、暖炉の周りはただどす黒く、テーブルの横には椅子が転がっていた。もしこの部屋が荒廃していなければどれだけ素晴らしいだろう。少し惜しい気持ちになる。暗い屋敷を逍遙しているレダを、窓の外から灰色の薔薇達が監視している。気付かぬレダは、黄色いワンピースをなびかせて、自由にままに歩き回る。

「ここに入つてから何分たつたのだろう、レダはすっかり恐怖を忘れて冷たい屋敷の体内をかけまわつた。そして、その中の一番奥ではないかと思われるそこに、大きな大きな扉を見つけた。

屋敷内の他の場所と違い、どこかに違和感を覚える。あまり見ない柄の扉で……けれどどこかが上品で。

ただ、不思議なことに、この扉だけ真新しいのだ。汚れなど皆無で、ノブや番には艶すら見受けられる。他の場所は全てが朽ち果てているのに、ここだけは違う。

何故だらうか、レダはこの扉が自分を呼んでいるように思えた。胸が高鳴る。不信感を抱きつつも、レダはその扉を開いてしまつた。

『…………』

声が、出なかつた。

いや、實際は出せなかつたのだ。扉を開いた途端に目の前に現れた、余りに異常な光景に驚いて。

『あ…………』

確かに扉を開いた瞬間、細い冷や汗が背中を伝つた。だけれど、レダはまだ少女の心を持っている。可憐で素敵な猫の心。現れた光景に対する不安よりも、関心と感動の方が先にくるのは当たり前。

艶やかに広がる広い広いホール。

天井からレダを見下ろしている、大きく豪華なシャンデリア。

ホールの隅々に建てられた大理石の高い柱。

『素敵…………』

レダは思わず呟いた。彼女の瞳は美しく輝き、期待と興奮を秘めている。足が、勝手に動く。扉を閉めて、薄暗いそのホールに入る。広い。ただ広い。

レダは自然と踊り始めていた。広い空間で風の様に舞う彼女はまるで本物の妖精のようだった。髪の毛の金色を、ワンピースの黄色を、周囲に漂わせながら軽やかに歌い、踊る。頭の薔薇が、よく似

合っていた。

『あ、り……？』

ふと彼女は足を止めた。その瞳はただ一点に釘付けられていた。
彼女の目線の先には……

この広いホールは六角柱の形をしていた。そして、レダが迷い込んだあの扉と真向いの位置にある壁に、まるで何かを隠す仮面のように、白い布がかけられていたのだ。

他の壁は全て輝く大理石で、金色の妖精の姿を映すまでに輝いている。まるでついさっき磨かれたものであるような光沢。埃すらない。そんな中、ただ一面だけ、不自然な白い布が輝く大理石を覆っているのだった。

レダはその壁にかけより、躊躇はしたが でも勢いよくその布を引っ張った。

例えば、そこに現れたのが鮮やかな色使いで描かれた妖精の姿の壁画であつたとしたなら……、あるいは、その布の向こう側にまた扉があつて、別の部屋への隠し通路だったとしたなら……。

レダがここまで驚くことはなかつただろう。彼女の瞳がここまで輝くことはなかつただろう。

レダの口は開いたまま。瞳も大きく開いたままの状態でまばたきすら出来ない。『…………わあ…………』感動の吐息が漏れてくる。レダの表情はただただ驚きだけを宿していた。

鏡。

レダが白い布を壁から引きはがす。はらはらとその布は散るよう下に落ちていく。だんだんと壁があらわになる。 だけどそこ

に壁はなくて。

鏡……？かしら……

白い布の下から現れたのは、大きな大きな鏡。壁全体が、鏡と化している。その鏡には、呆然と手をつくレダの可愛い顔が映つている。ワンピースは思つた以上にぼろぼろになつていて、少し痛々しかつた。頭の薔薇は相変わらず灰色だ。

しかし、それだけならレダはここまで驚きはしないだろう。いくら大きいと言つても鏡は鏡。珍しくもなんともない。レダが驚いた原因は、その鏡に映つているものにあつた。

もちろん、レダの姿は一番大きく映し出されている。金色の髪も空色の瞳もそのままに。ただ、その鏡の中では……踊つているのだ。たくさんの”人”が。

暖かいシャンデリアの明かりのもとに、たくさんの人が一人一組になつて踊つている。女性は皆がそれぞれに、美しい色とりどりのドレスで着飾り、その頭には羽帽子やティアラのようなものも。男性だって、黒いスーツに身をつつみ、金色の髪や黒い髪や……みんなが笑いあいながら、手と手をとつてゆつたりと踊つている。いつの間にか、美しい音楽や笑い声までも聞こえてきていた。『……夢？』

レダは素敵なその光景が信じられず、目を閉じた。ゆつくりと瞼の中が暗闇に染まつたのを確認したのち、また瞼を開く。おそるおそる、ゆうるりと。

けれど、やはり目の前で華々しく踊る人々の姿は消えなかつた。鏡の中で、尽きることなく踊つている。

レダは鏡から目を離し、後ろを振り返つた。思いきり……大きな瞳は開いたままに。

『！？』

しかし。

なんと……誰もいないのだ。鏡の中からは今でもずっと音楽も笑い声も聞こえるといふのに、レダのいるホールは先と変わらずひんやりとして暗い。鏡の中のシャンデリアも、レダのいるホールの中のシャンデリアも、確かに同じもので、よくよく見比べると、大理石の壁も、六角形のホールの形も同じであつたのに。

ただ 。

”こちら”のホールのシャンデリアには、明かりはついていない。それどころか、人もいない。誰一人。いや……あえて言つなら、レダただ一人が呆然と立ち尽くしているだけだ。

『何……これ……』

鏡の中をもう一度覗きこむ。先ほどとは音楽が変わつていて……でも相変わらず人々は踊り、鮮やかな色が目に痛い。そして、その風景をただ見つめているレダの姿も、しっかりと映つていた。

ただおかしいのは、その鏡の中で、確かにレダは存在しているはずなのに、誰もレダを見ていないので。気付いてすらいないように見える。綺麗に正装した人々の中で、汚れたレダのワンピースはみすばらしく、金色の髪もくすんでいるのに……それなのに誰一人、こちらを見ないのだ。

ここで……踊つているはずなのに。

もう一度レダは振り返り、ホールを見、鏡によればそこで楽しく踊つているであろう人々の姿を確認しようとした。もちろん、出来なかつたが。

漠然とした不思議な感覚が脳裏を支配し、何よりこの幻のような鏡が美しい。不安なんかよりも、ただ、美しい。レダは幼い子供が紙芝居に夢中になるかのように、ただただ鏡に入つていた。

その時、レダの心の中に、小さな一滴の染みのよつて、小さな考えが浮かんだ。

鏡につづるのに、田には見えないもの

レダは幼い頃から、たくさん物語を読んできた。可愛らしいものが好きな彼女は、童話の世界がまるでシャボン玉のように綺麗で、儂くて、魅力的なもののように思えていたから。そんな中で確かに出てきた。

『シエラ』

どこからともなくグラムの声がして、シエラは振り返った。小さな部屋の中を見回してもグラムはいない。いるはずがない。彼は3日前、事故で亡くなつたのだ。街で馬車にはねられて……雨の中。思い出すと、シエラの瞳から涙がこぼれ落ちた。

いつも一人で遊んでいた。隣りに住んでいたグラムは兄のようにシエラを親してくれて、よく季節の花で冠を作ってくれていた。シエラは、静かに静かに、誰にも知られることなく、そんな優しいグラムに想いをよせていたのだ。

『グラム……』

ぽつりとその名を呼んで、涙を拭う。これ以上くよくよしてはいられないから、シエラは立ち上がつた。部屋から出ようと、出口に向かう。

『シエラ……』

また、聞こえた。あの優しい声……シエラを包み込む、グラムの

声。大好きな声が……

『…………グラム？』

不審には思つたが、シエラはその声に応えた。もしも一度グラムに会つて話せるのなら……。藁にもすがる思いで、シエラはグラムの名を呼んだ。

『グラム？グラムなの……？』

『シエラ…………僕はここに』

君の横にいるよ。優しいグラムの声は、確かににするのだけども、姿は見えない。天井、部屋の隅々まで探したのに、姿だけが見つからない。

『グラム…………ツ』

泣きそうになりながら、その名を呼んで。ふと……シエラは壁にかけてある鏡を見た。

いた……

グラムは確かに、シエラの横にいた。優しい瞳でシエラを見つめていた。涙がこぼれて……でも実際には彼の姿は見えなくて。複雑な心境になりながらも、鏡越しにシエラはグラムの瞳を見た。

グレーの瞳は澄んでいて、いつの日にも変わらなかつた彼の穏やかな性格が染み出しているようだ。

いつまでもいつまでも、そばにあると思つていた瞳

急に冷たい氷のような空気が、レダの背後を襲つた気がした。

「ここは鎧びれた屋敷の中。

庭に咲くのは不思議な不思議な灰色の薔薇。

鏡の中ですか、踊らない人々。

レダの顔は突然に青ざめた。夢見心地でこの素敵さに溺れていたのに、いきなり腕を掴まれて引きずり出されて夢から覚める。今では鏡の中で踊り狂う人々が恐ろしい。鮮やかに動く色達がおぞましい。

早く早く、出なれば

ただそれだけの衝動につき動かされ、レダは鏡に背を向けた。走り出そうとした、その時。

『ねえ……僕と踊つてはくれませんか?』

鏡の中から、声がした。

驚きながらも振り返ると、一人の若い男性が立っている。胸のポケットには……灰色の薔薇が、飾られていた。

『僕と、踊つて、いただけませんか?』

ただ、何か恐ろしい物を見るような目で見つめているレダに、その青年はもう一度ゆっくり繰り返して言つた。表情は静かに優しく微笑んでいる。そしてその微笑みは、確かにレダに向けられていた。

誰も私に気付いていなかつたはずなのに……

返事などできるはずもなく、鏡の中から話しかけてくる青年の瞳をただ、見つめる。

レダの瞳を淡い空色と言つのなら、この青年のは濃い藍色か。長いまつげは美しく伸び、その瞳の形をよりくっきりして鮮明なものに仕立てあげている。白い肌と薄い金色の髪はレダのものと重なり、上品な印象をかもしだしていた。青年の髪は天に向かつて昇るゆるやかな煙のように立てられていて、力強い。細身の黒い正装に、鮮やかな青のタイ。そして、レダに右手を差し出している。いざなうように、優しかつた。

相変わらず、青年の背後で踊る”人々”はレダの姿に気付いていないようだ。青年のことも見えているのかいないのか……誰もこちらを見ない。

『誰……』

レダはおびえながらも、その鏡の中の青年に問う。青年は、少し驚いた顔をしたのち、また柔らかく微笑んで言つた。

『僕は、イオ』

『イオ……』

レダはその美しい響きを反復するよつに声に出した。男とも女ともれる、中性的な名前。何故だか……とても愛しく感じた。

けれど、もうレダの中は恐怖でほとんど埋まっていた。この異様な空間から抜けださなければ。

落ちてはいけない

捕らえられてはいけない……

『じめんなさい』

レダはイオに礼儀よく頭をさげ、そのまま彼の瞳を覗かないとうにして、踵を返した。

彼の瞳には、何か魔力があるのだ。引き込まれてしまいそうで、怖い。

しかし。

『！？……あつ』

振り返つて走り出そうとしたのに……このホールから出ようとし始めたのに。振り返つたそこに立っていたのは、他でもない、イオだった。

イオばかりではない。そこはまるで鏡の中。

イオの背後ではたくさんの人々が鮮やかな色を纏つて踊っていた。シャンデリアは明るく暖かい灯を放ち、美しいクラシック音楽が流れる様にこのホールを満たしている。暖かく、綺麗な空間。けれど、レダの胸はただただ不安で一色だった。

鏡の中に入ってしまった？

ゆつくりと振り返り、鏡を見る。そこには……ぼろぼろのワンピースを着た金髪の少女、黒い正装のしなやかな青年、その背後で踊

り狂う鮮やかな色達。

完全に、ついさっきまでは鏡の中にあつたはずのその空間だった。その空間の中に、レダはいた。もう、抜け出せない。

『そう……』

イオはとても悲しそうに微笑んでレダを見ていた。そして、しばらくレダを意味ありげに見つめると、肩をすくめて『では。』と言つてレダに背を向けた。

ゆるやかに歩き、イオは踊り狂う人々の中に消えて行くようだつた。

『待つて……！！』

今、ここに一人で残されても、レダには何も出来ない。恐怖と不安におびえ、泣くしかない。それは、あまりにつらすぎる。

『待つてください……』

レダはイオの後ろ姿にかけより、声をかけた。『？』イオが振り向く。その碧い瞳が、レダのそれを捕らえる。

『私で……いいんですか？』

みすぼらしい自分に声をかけてくれたイオなら、助けてくれるかもしれない。僅かな、小さな、希望にすがりつきながら。

イオは驚いたように眉をあげた。が。

『貴女が良ければ』

そう言つてイオはレダの手をとると優しく唇を落とした。挨拶とはわかっていても、レダの頬は赤く色付く。

『こっちへ……』

イオは微笑んでレダの手を引きながら、人々の群れに入つて行く。レダはイオのすらりとした後ろ姿を追いながら『あのっ……』必死に声をかけた。

こんなワンピースで……こんな髪で……踊りたくない……つ

けれどイオは振り返らない。レダは悲しくなってきた。レダだつて女なのだ。綺麗な鳥達が舞う中に、みすぼらしい羽では入れない。ワンピースは相変わらず裾が避け、汚れがつき……さつきイオがキスした手にしたって、汚れていたはずだ。

ついに、人ごみの中に入つて行く。レダは半分諦めて、目を閉じた。

『……大丈夫?』

イオの優しい声がして、レダは固くつむった瞳を開いた。開いた瞳に映つていたのは、人々の見下すような目でもなく、あざ笑う目でもなく、イオの心配そうな顔だけだった。

『あれ……?』

不思議に思つて振り向くと、なおも踊る人々の群れを通り過ぎたあとだつた。どうやら、田を閉じてイオのあとについて歩く間に通り抜けていたようだ。

あんなに人がいるのに、ぶつかりもしなかつた。

なんだか不思議な感じで……でも、とりあえずはイオが人ごみを抜けてくれたことにホッと胸をなで下ろした。そのまま踊ることになつていたなら今頃は恥ずかしさで顔が真つ赤だつたろうから。後ろを振り返つたら、レダがあまりにきつく目を閉じていたから不審に思つたのだろう、イオはまだ心配そうにレダを見つめている。

『あ……大丈夫です……』

『そう、じゃあついて来て。』

イオは安心したように息をつくと、レダをホールの外へといざなう。ホールの大きな扉を開き、片手を差し延べ、エスコートする。

ホールの外も、この世界なんだろうか……

もしかしてこれは、淡い夢ではないだらうか。

素敵な丘で眠つてしまつたまま、目を覚ませないでいるので はないだらうか。

けれど、夢ではなかつた。

そこにあるはずの荒廃した屋敷の風景はなくなつていた。変わりに美しい屋内の情景が広がつてゐる。塗れだつた絨毯は赤く鮮やかに輝き、蜘蛛の巣だらけだつた隅々にまで、光沢が走つてゐる。イオはなおもレダの手を引きながら長い廊下を歩いていた。その間、彼は一言も話さなかつた。レダはイオの横にぴたりとくつついで、歩いてゐる。時折、彼の顔を覗きながら……。そしてまた時折は、辺りの風景を見回しながら。

やはりこの屋敷の中は、綺麗にはなつてゐるけれど、始めにレダが迷いこんだあの屋敷に間違いはなかつた。あの冷たい屋敷に違ひなかつた。つまりレダは、屋敷に迷いこみ、その屋敷の奥にあるホールの鏡の前から、別の世界に入り込んでしまつたようだつた。信じがたい現象ではあるが、実際に自分の身に起きていること。否定する意味もない。

『ここ……』

イオがレダを連れたどり着いた先は、あの……ほんの数時間前にのぞいた時には、ただの朽ちた家具しかない、暖炉はすすに黒ずんでいた、あのリビングだつた。

『気に入つた?』

レダは素直にこくんとうなづく。その仕草は、まだ7つや8つの少女の姿を思わせる。子供の透明な心を持つて、愛らしい笑顔のまま成長してきた人。その心の内側が見事に反映されたかのような、可愛らしい外見。

やはり、レダが先に思った通り、元のこのリビングは素晴らしいものだつた。今となつては暖炉の灯も赤々と燃え、あの時には無残

に転げていた椅子もきれいに整頓されている。床も磨きあげられ、穴一つないソファは思った以上に上質だ。

『座つていて』

イオはレダをその上質な赤い布のソファに座らせると、静かに部屋を出て行った。一人取り残されたレダは、不安に包まれながら、目の前の暖炉の火をぼおとながめていた。

何故こんなことになってしまったのか。

『ここは一体どこなのか。

考えても考えても、決して見つかることのない答えを必死に探すかのように、無意味に頭をめぐらせる。

思えばあの時、屋敷に入ってしまったこと。灰色の薔薇の誘惑に負けてしまったこと。今となっては悔やめないけど、全てが原因だつたのかもしれない。好奇の隣りには常に危険が影のようについて回る。それを見抜けなかつた、かわいそうな子猫。『もう、嫌』レダはガクンと首をうなだれ、両手で覆つた。己の浅はかさへの激しい後悔。抜け出すことの出来ない悲しみ。

そんなレダにとつての唯一の救いは……

『待たせてごめん』

言つてイオは部屋に入り、ドアを閉め、レダの元へ歩み寄る。その腕には、一着の服のようなものがかけられていた。

『あの……いえ……』

どもりながらも、レダは首を振る。妙に愛しく思える、その青年に向かつて。

青年はにこりと笑つて、レダの手をとると『こっちへ』。そして歩き出す。

リビングを抜けすぐのところに、浴室があつた。特に広くない、普通の浴室だ。もちろん、壁は全て大理石で、蛇口などの金具は金製であつたが。

『体、流してください』

『え……』

正直、嬉しかった。もつれた髪も、汚れた顔も手足も服も、全てスッキリさせたくて仕方がなかつたのだ。だけど、ここは知らない屋敷の知らない浴室。

『でも』

ためらつレダをぐいと脱衣場へ押し込むと、

『ここは僕の屋敷ですから。気にしないで使ってください。』

そう言って彼は足早にその場を去つて行つてしまつた。

仕方なく……いや、むしろ有り難く、レダはイオの好意に甘え、浴室を使わせてもらつことにした。

しつかりと汚れは洗い落とされ、一度濡れて乾いた髪は、空気を含んでふわりと軽い。白い手足も綺麗で、少し気分の晴れたレダの瞳は輝いている。また子猫のような愛らしさが、彼女の周りに漂つてゐる。浴室にいる間、頭からはずしていた灰色の薔薇を、もう一度同じように髪に差し込む。綺麗に輝く、金色の髪に。

今まで……黒なんて纏つたことがなかつた。

鮮やかで淡い色が好き。

優しくて清々しい色が好き。

それなのに、イオがレダへと用意したドレスは、深い闇のよつに漆

黒で暗い。袖や胸元には白にレースが付いてはいるものの、全身のほとんどを黒が支配しているから、はつきり言つて地味に見える。胸は広めに開き、レダの白い肌が大きく露出している。膨らんだ肩の袖は少し窮屈で、丈の長い手袋も同じようなものだつた。

『何故、私に声をかけたんですか?』

上品でなめらかな黒のドレスを着せてくれているイオに、問う。田の前の全身鏡に、レダとイオの黒い姿が映つていた。イオは丁度、レダのドレスの後ろに付いている大きなリボンの形を整えているところだった。

始め、レダはためらつた。

もう自分はそこそこの年であるのに、ドレスなんて着たことがないから着方を知らなかつた。けれど、いきなり会つたこの青年に着せてもらつなど、恥ずかしくてできるはずがないと。青年は気にしなくていいと言つて手を差し延べてくれるのだが、レダはうんと言わない。仕方なく、イオはじゃあと言つて、レダとドレスと全身鏡だけを置いて、リビングから出て行つた。

『扉の外で待つてるから』
とだけ、レダに伝えて。

『キヤア』

リビングの中からレダの声が聞こえたのはそれからすぐのこと。

『開けるよ?』

びっくりしてイオが扉を開けると、尻餅をついてぺたんと座つているレダがいた。その頭には、ドレスのリボンがほどけたらしく、黒く太めの紐が絡まつていた。どうやら、それに引っ掛けたて転んだようだ。

問答無用で、イオに着せてもいいことになった。

イオの手つきはしなやかで、すぐにレダを黒で包んだ。『本当はコルセットも着るんだけど』そう言いながら優しくドレスをレダに着せて行く。レダの胴は締まつてはいないもののすらりと細く、コルセット無しでもさほど関係ないようだつた。

何よりイオは、レダが窮屈を嫌うのを知っていたから……。いやそれよりもずっと前から、レダが鮮やかな色を好むことだって知つていたのだが。

だからあえて、コルセットは着けなかつた。

『だつて、貴女が一人でいたから

レダに何故声をかけたのかと問われ、イオは少し考えたのちに答えを出した。黒いリボンは形がととのえられ、見栄えがいい。『うん』、イオはそのリボンを見て、うなづく。

『私、あんなに汚い格好だつたのに』

イオの体が全身鏡から一度出て行き、また戻つてきた。その両手には、輝く宝石。幾つもの石がちりばめられた重量感のある、光り輝くネックレスが握られていた。

『服は汚くても、貴女自身は綺麗でしょ』

軽く笑うように、イオは言つた。レダの首元から前に手を出して、ネックレスをその白い胸元に乗せる。イオの小さく静かな吐息が当たる気がして、レダは顔を下に向けた。『前を向いて』イオは後ろからレダの頬を軽く持つと、その顔を上にあげた。レダの顔は恥ずかしさに真っ赤に染まる。

『それに、僕には踊る相手がないから……』

金色に輝くネックレスは、鏡に反射した光をその身に取り込んで、

逃がさない。ネックレスの真ん中に大きく埋め込まれている、青色の宝石。色は深く濃く、どちらかと言つてレダよりイオの瞳に近い色。

レダはその宝石のようなイオの瞳を鏡越しに見ながら、聞いた。

『何故?』

イオの姿は決しておかしくなく、むしろ他の人より美しい。身長も高ければ、その態度に気取るところも無く、相手など向こうから寄つてきそうなものだ。ただ、この立つた髪だけは、あまり上品とは言えないかも知れないが。

『みんな僕のことをおかしい』と言つて避けますから』

レダの胸元で輝く宝石は、イオの胸に締まつたタイとほぼ同色で。

『何故おかしいの?』

イオはレダの髪に飾つてある灰色の薔薇をそつと抜き取り、己の胸ポケットに入れる。

『何故でしょう……たまに、僕には他の人達には見えないものが見えるらしくて』

またイオが全身鏡から姿を消す。

『一体どんな?』

今度は手にキラキラしたクリームのようなものを持って現れた。

『いろいろです……時には小鳥であり、また時には少年であり、また時には少女であります……』

言つてイオはレダの瞳を見た。鏡越しではあるけれど、真剣なまなざしに瞳を捕らえられてしまつ。

『……え……』

少し困りながら、レダは動搖した。

『まあ、最近は全然見えないですけどね』

にこつと微笑む、と同時にレダの胸を抱いていた緊張がその腕をのけた。

『僕は数年前、恋人と離れになってしまつて』

イオはあの光の粒がまじつたクリームをその手にとる。落ち着い

た動作がしなやかで美しい。

『もう一度と会えないと思つていたけど

そしてその手でレダの柔らかな巻髪を撫でる。優しく優しく。

『……何故、離れ離れに?』

やがてレダの巻髪は光を纏う。キラリキラリと輝いて、それはまるでの妖精の輝き。

今度はイオはレダの質問に答えることはなかつた。ただ、胸元のポケットからレダの薔薇を取り出して、もう一度その髪のもとあつた場所に飾る。そして、後ろから、優しくレダを抱き締めた。

『あのつ……』

レダは驚いて、何も出来ない。鏡で自分の顔を見ると、だんだんと己の頬が赤を帯びていくのがわかる。混乱して動搖して。イオは相変わらずレダを抱き締め、その腕を緩めない。

レダは鏡の中で、自分の胸元で輝くイオの瞳の色の宝石を見た。その宝石の深い色を見ていいふちにだんだんと落ち着きを取り戻し、青年の手を握る。白くて細い腕。長い袖のスーツでは見えなかつたけれど、まるで骨のように、その腕を細く感じた。

『やつと……会えた……レダ』

イオはレダの首筋に顔をうずめて、確かにそつと呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4528a/>

Momentaly*Beautiful

2010年10月27日23時32分発行